

### 新原海軍炭鉱の雑誌『新原』(6)

大正15年(1926年)12月25日、大正天皇が崩御し、皇太子裕仁親王が即位しました(昭和天皇)。同日、昭和と改元したため、昭和元年は7日間しかありません。

昭和3年(1928年)11月に京都御所で即位の礼、大嘗祭など新天皇即位にともなう行事が行われました。これが御大礼、御大典などと呼ばれることになります。

海軍燃料廠採炭部発行の雑誌『新原』昭和4年1月号は、次のとおり御大典を記念した構成になっています。

御大礼感激記 長田正義  
新年の辞 萩尾善次郎  
倫敦にて御大典を迎ふ

猪俣昇  
(以下略)

巻頭の口絵には「大礼観兵式に於ける 聖上陛下の勇姿」(昭和3年12月2日)として、代々木練兵場に整列した兵士を眺め、騎乗の昭和天皇の写真を掲げています。

口絵のもう一枚は「地方賜饌拝受者」(左ページの写真)として、大饗第一日の11月16日、本庁舎前庭(現在の新原公園)で写った記念写真です。写真は不鮮明ですが、高級軍人は大礼服で勲章を帯び、サーベルを突いています。文官(または須恵村長など関係者が招かれたのかもしれない)は燕尾服のようです。大嘗祭(11月14日・15日)の後、京都で大饗の儀が行われ、地方在住で参加できなかった文武官には「賜饌」(食事会への招待)が行われたのです。大饗第一日が16日、大饗第二日と大饗夜宴が

17日と関連の行事が続きます。京都では大勲位(最高の勲章を授与された人、内閣総理大臣以下、それぞれに招待された人たちが参加します。

地方在住者に対しては、「即位礼及び大嘗祭の後、(大饗第一日ノ儀)の当日(十一月十六日)、地方に於いて左の諸員に饗饌を賜わせらるゝとして、1〜19までの規定があり、15に町村長、18に官公私立小学校長など、19に「各種事業功労者、優遇者及び名望家」が入っていて、これは公職についていない、民間人を招待したとも言えます。

服装の指示があり、男子は大礼服、正装  
通常礼服(燕尾服・黒高帽)、  
礼装  
通常服(フロックコート)、  
通常礼装

となっています。左ページの写真はこれに沿ったものと言えるでしょう。例えば前列中央の軍人(採炭部長長田正義と思われる)は房の垂れた肩章が付き、大礼服、正装に該当します。「御大礼感激記」によると、大饗第一日、第二日に相当する11月16日と17日は「奉祝どんたく

の仮装隊群が集まり、当地方の古老に聞くも、未だ曾て無かつたと云われる程の、非常なる賑わいでしたとあります。これは、各坑の坑夫が仮装したり、音楽を奏でたりしながら、本庁舎に群がったというのでしよう。それがまるでドンタクのようだった、というのですが、このドンタクは現在の「博多どんたく」ではなく、オランダ語の日曜日(ソントーク)がなまってドンタクとなり、わいわいと楽しくお祭り騒ぎをすることをドンタクというようになったものです。

その仮装隊の中には「附近民坑農村の人々」も交じっていたというので、海軍ではない民間の炭鉱の坑夫や、坑夫以外の一般の村民も、「お上の炭坑」(海軍炭鉱のこと)、中でも官位の高い採炭部長に敬意を表することで、天皇陛下に直接お祝いを述べたという形を取りたいという思いがあったようです。その様子を福岡日日新聞は「糟屋炭田賑わつ」と見出しに書いたということです。

さて、海軍技師猪俣昇はこの

御大典を出張先のロンドンで迎えました。以下、猪俣の文章を引用します。引用文は、現代のかなづかいに直しています。文中に出てくる至尊は天皇、曠古は今までに例がないことで、それほど盛儀ということですが、

昭和三年十一月十日午後三時、これぞ大日本帝國七千万の同胞が、至尊御登極、曠古の盛儀を祝し奉り、聖寿万歳の声は津々浦々にどよめき渡った時刻である。恰も倫敦は未だ夜の明けやらぬ午前六時に相当するのである。

遥かに東天を拝すれば、霧の倫敦も今日ばかりは冴え渡り、降るが如き星の光も、東に既に紅霞に薄らいて居る。今日のよき日、正午と云うに大使館邸に於いて、帝在留官民合同の拝賀式が行われるのだ。各新聞は数日前から日本皇帝の御肖像を掲げ、大典の古典的盛儀を報道し

て居たが、今日は大使館邸にて行わるべき、「プログラム」その他を掲げ祝意を表して居る。午前十一時半、官邸に至れば日章旗高く翻り、大玄関には紅白絹の天幕をしつらえ、菊花御紋章の瓦斯の「イルミネーション」などが用意され、盛典の気分は弥が上にもそそられる。正装の文武百官、紳士淑女が続々と自動車にて集合し、その数二百以上にも及んだ。やがて定刻となるや、佐分利代理大使恭しく祝辞を奉読し、参列諸員各個に御真影(天皇陛下の写真)を拝し、記念撮影を終えて、一同は別室に於いて立食の饗応に与り、日本酒に、シャンパン酒に、心ゆく迄飲を尽くし、最も厳肅に、且つ盛況裡に午後二時散会した。(中略)

かくして一週間にわたる奉祝の盛儀は終わりを告げたのである。アア母国を距る数千里、異国の空に

翻る日章旗の元に打ち集い、君が代を壽ぎ、鼓腹の幸を享くるこそ、君の御稜威はいと畏し、帝國国威の然らしむる所、国を出でて初めて君国の恩を痛切に感じた。

16日には「大晩餐会」が開かれ、英国軍楽隊の演奏があり、最後に君が代の演奏で散会したとも書かれています。大日本帝國や日本皇帝、御真影という表現には戦前の社会のあり方が反映しています。

※御稜威は「御威光・御威勢」に同じ。



大饗第一日 (於廳舍前庭) 十一月十六日